

平成21年度 病害虫発生予察情報

発生予報第4号（6月）

平成21年6月12日
島根県

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	予想発生量		
普通作物	イネ	葉いもち	やや少ない		
		紋枯病	やや少ない		
		縞葉枯病	多い		
		萎縮病	やや少ない		
		黄化萎縮病	やや少ない		
		ヒメトビウンカ	多い		
		ニカメイチュウ	少ない		
		ツマグロヨコバイ	平年並		
		イネドロオイムシ	少ない		
		イネミズゾウムシ	平年並		
		果樹	ナシ	黒斑病	やや多い
				黒星病	平年並
				シンクイムシ類	やや多い
ハマキムシ類	やや少ない				
ハダニ類	やや少ない				
アブラムシ類	平年並				
カキ	カキ			円星落葉病	少ない
		カキミガ	平年並		
		果樹全般	カメムシ類	平年並	

ヒメトビウンカ注意報発令中（4月23日発表）

中国地方1か月予報（6月13日～7月12日・広島地方气象台6月12日発表）

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）>

気温

30%	40%	30%
-----	-----	-----

降水量

40%	30%	30%
-----	-----	-----

日照時間

30%	40%	30%
-----	-----	-----

低い（少ない）	平年並	高い（多い）
---------	-----	--------

A. 普通作物

1) イネ

(1) 葉いもち

予報内容

発生地方 県下全域

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

予報の根拠

①現在、本田での発生は認めていない。

②6月上旬に実施した補植用置き苗の調査（790圃場対象）においても、発生圃場は確認されていない（平年1.8%）。

③常習発生地では育苗箱施薬の実施率が高い。

④向こう一か月の気象は本病の発生を助長する要因とはならない。

(2) 紋枯病

予報内容

発生地方 県下全域

発生時期 平年並

- 発生量 やや少ない
- 予報の根拠
- ①前年の発生量から、越冬菌量はやや少ないと考えられる。
 - ②常習発生地では育苗箱施薬が普及している。
 - ③向こう一カ月の気象は本病の発生を助長する要因とはならない。
- (3) 縮葉枯病
- 予報内容
- 発生地方 県下全域（特に前年発生地域）
- 発生量 多い
- 予報の根拠
- ①媒介虫のヒメトビウンカの発生量は多いと予想される。
 - ②前年22年ぶりに多発生し、越冬世代の保毒虫率は約6%と推察され、高い。
 - ③前年より1か月早い6月9日、県東部のハナエチゼンで初発生を確認した。
- (4) 萎縮病
- 予報内容
- 発生地方 常習発生地
- 発生量 やや少ない
- 予報の根拠
- ①媒介虫のツマグロヨコバイの発生量は平年並みと予想される。
 - ②近年、本病の発生は極めて少なく、保毒虫率は低いと考えられる。
- (5) 黄化萎縮病
- 予報内容
- 発生地方 常習発生地
- 発生量 やや少ない
- 予報の根拠
- ①前年の発生量から、菌密度は低いと考えられる。
 - ②向こう一カ月の気象は本病の発生を特に助長する要因とはならない。
- (6) ヒメトビウンカ
- 予報内容
- 発生地方 県下全域（特に前年発生地域）
- 発生量 多い
- 予報の根拠
- ①4月23日付け注意報第2号参照。
 - ②6月上旬の巡回調査では、捕獲数は1頭/50株（平年6月下旬・0.13頭/50株）、発生圃場率は約50%（平年〃・7.1%）で発生量は平年に比べて多い。
 - ③向こう1か月の気象は本種の発生を特に抑制する要因とはならない。
- (7) ニカメイチュウ（第1世代）
- 予報内容
- 発生地方 県下全域
- 発生時期 平年並
- 発生量 少ない
- 予報の根拠
- ①予察灯、フェロモントラップにおける越冬世代成虫の誘殺量は平年に比べて少ない。
 - ②向こう1か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。
- (8) ツマグロヨコバイ
- 予報内容
- 発生地方 県下全域
- 発生量 平年並
- 予報の根拠
- ①予察灯における誘殺量は平年に比べてやや少ない。
 - ②6月上旬の巡回調査では、捕獲数は7.0頭（平年6月下旬・3.1頭/50株）、発生圃場率は29.6%（平年39.3%）で発生量は平年並みである。
 - ③向こう1か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。
- (9) イネドロオイムシ
- 予報内容
- 発生地方 県下全域
- 発生量 少ない
- 予報の根拠
- ①6月上旬の巡回調査では発生量は平年に比べて少ない。

- ②向こう1か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。
- (10) イネミズゾウムシ
- 予報内容
 発生地方 県下全域
 発生量 平年並
- 予報の根拠
 ①予察灯における越冬世代成虫の誘殺量は平年に比べて少ない。
 ②6月上旬の巡回調査では、発生量はほぼ平年並みである。
 ③向こう1か月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

B. 果樹

1) ナシ

(1) 黒斑病

予報内容
 発生地方 ナシ(二十世紀)栽培地帯
 発生量 やや多い

予報の根拠

- ①5月25日の巡回調査では、発病葉率3.8%(平年2.1%)であり、発生量は平年に比べてやや多い。
 ②向こう1か月の気象は本病の発生を特に抑制する要因とはならない。

(2) 黒星病

予報内容
 発生地方 県下全域
 発生量 平年並

予報の根拠

- ①5月25日の巡回調査では、発生量は平年並みである。
 ②向こう1か月の気象は本病の発生を特に助長する要因とはならない。

(3) シンクイムシ類

予報内容
 発生地方 県下全域
 発生時期 やや早い
 発生量 やや多い

予報の根拠

- ①フェロモントラップ(安来市、出雲市)でのナシヒメシンクイ雄成虫の誘殺盛期はやや早く、誘殺数はやや多い。
 ②向こう一カ月の気象は本種の発生を抑制する要因とはならない。

(4) ハマキムシ類

予報内容
 発生地方 県下全域
 発生時期 平年並
 発生量 やや少ない

予報の根拠

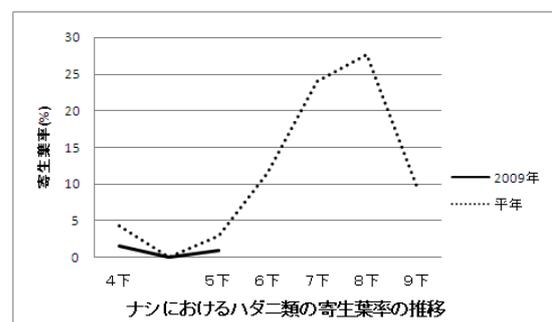
- ①県予察圃場(出雲市)のフェロモントラップにおけるハマキムシ類雄成虫の誘殺盛期はやや遅く、誘殺数はやや少ない。
 ②向こう一カ月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

(5) ハダニ類

予報内容
 発生地方 県下全域
 発生量 やや少ない

予報の根拠

- ①5月下旬の発生量は寄生葉率0.9%(平年2.9%)、寄生虫数1.1頭(平年5.9頭)と平年に比べてやや少ない(グラフ参照)。
 ②向こう一カ月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。



(6) アブラムシ類

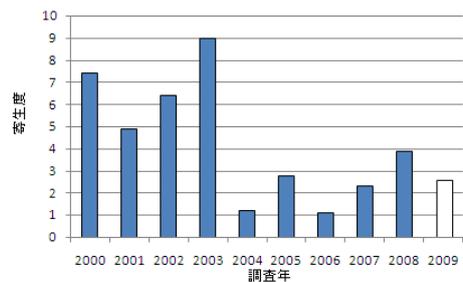
予報内容

発生地方 県下全域

発生量 平年並

予報の根拠

- ① 5月下旬の寄生新梢率8.0%
(平年11.1%)、寄生程度2.6(平年4.4)
と平年並みである(グラフ参照)。
- ② 黄色水盤への有翅虫飛来数は平年並みである。
- ③ 向こう一カ月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。



ナシにおけるアブラムシ類の寄生度推移(5月下旬)

2) カキ

(1) 円星落葉病

予報内容

発生地方 県下全域

発生量(感染量) 少ない

予報の根拠

- ① 前年の発生は平年と比べて少なく、伝染源量も平年と比べて少ないと考えられる。
- ② 向こう一カ月の気象は本病の発生を特に助長する要因とはならない。

(2) カキミガ(第1世代)

予報内容

発生地方 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

予報の根拠

- ① 前年の第2世代幼虫による被害は平年並みであり、越冬量は平年並みと考えられる。
- ② 向こう一カ月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

3) 果樹全般

(1) カメムシ類

予報内容

発生地方 県下全域(特にナシ無袋、カキ栽培地帯)

発生量 平年並

予報の根拠

- ① 5月4半旬から6半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシの総誘殺数は13頭(平年値19.7頭)で平年並みである。
- ② 向こう一カ月の気象は本種の発生を特に助長する要因とはならない。

農薬の安全使用の徹底を!

- ・ 農薬の使用基準(適用作物、使用量又は濃度、使用時期、総使用回数)を遵守する。
- ・ 防除履歴(使用日時と場所、作物名、農薬の種類と量)を記帳する。
- ・ 農薬散布時には周辺作物に飛散(ドリフト)しないように注意する。
- ・ 水田で使用する農薬の止水期間を守る。
- ・ 有効期限切れ農薬は使用しない。
- ・ 散布後は散布器具の洗浄を徹底し、空き容器は正しく処理する。
- ・ 病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬使用に努める。

○病害虫防除所のホームページでは発生予察情報の他、各種情報を掲載しています。

- ① ヒメトビウンカの発生経過と防除対策
- ② イネ縞葉枯病の初発生を確認
- ③ カキフジコナカイガラムシの防除適期予測

島根県病害虫防除所

TEL 0853-22-6772

FAX 0853-24-3342

ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp/shimane/>